

會きもあられも人の世をたのむへくは又取政の
徳川殿の信を義利で四十日かちと人子にえに
おしい斗にても世のつねあつて此世を以て力をも
人をも治めん事をたし免れしに是を得入し
凡人の事の人を言ふふさふさなる及ふ聖賢の辭に
ても打ちしたる世のやそふはねとひのくさる
とをいひえあつて舞の大聖なる好て進言を奉
し給つてとそものを備して只人の世にあらん
にえるとか能あらんきとり候はんま

一此君軍に臨じたまひ候へりささと名宮の御代して
進浦を給ふるのちか利しハ勿論や相又進し給ふ事
時かあつてハ風の如く大の如くおえしはさしとこえは
武徳安民記ふりしとく

夏ヶ原の信よ本多信俊書二信ハ
秀忠公の侍信して信州上田に至るとりるの侍合致
市肆利をきかふりて其田を捨て信州越中を信
ふりて由軍談一変を能れ吾大軍の賄賂をし加
りしれハ二信を江戸へゆさる二信合銀を信州
に送り江府小止る家ハ武留守宮の徳士内殿
四代左の出来。許二信より死物とせし信

多し諒り慰む一しお府もへきし中送るに成
ハ三州以来勇敢の譽れ阿る疎ふ射獵の達人
也君江府も末の互に禮音の多し難詰す正
信か曰く朝開闢より以来今度の如く天下の
諸侯も二に刻れ今度の合戦を例ときつて
内府公の安危此期に迫れ御縁利何人をも
か不存影射度と云ふに案連に著るハ山徒ハ大
軍味方ハ是に不し難し然れども必ず勝利を
らん先之成ハ地利に勝るは古垣垣に也すと解
内府公の爲るともかえぬ必方ハ天下を東國

方ハ小坊多れハ三本大兵を頼りしして掛合の雄雄と
好し唐場も於て東兵を塵にせんと思し其井其跡
と糸の辺も移り一戦を災と人と傳へし此時國を
まろし給るは市合戦何るに於てハ市諸村何處も
也若又時と云ふし給る頗危かんと然りと云ふ
富不味方の傳へし理何を東國方諸將中ハ密
掛合の軍を好む將云ハ何れ所謂 内府公福若
而則井伊直政也是火急に軍を好む極意の將
るれハ忽一戦を遂らん此後を麾し給ふ一し此
故ハ西軍ハ必不味方の勝利ありと云惟するある

もと果して西条臆脱のとき御縁村何れと云
一御曹力の鑑水給いしるに御長刀の長方あるを以て
かに人くも志おたれハ今更言へくも何れに
一戦争の御暇あるし中にも文事を捨て給を以て既
に丁酉二十六年戊子四月聚楽亭へ初幸の時殿上の御
遊に侍し給い奉程説と云御題少き

立そよ敷子代の色みそ

まづのよきいと君も御取入し

又文淵三年甲午三月十日御連歌の御咏叶今に傳
えれり 此君の御歌句に

賦何の連歌

花さけももつとめる何したるな

まづ江州信和山へ初て御入歌の時しづれの社ふり
りん縁をまら給給いし御歌

何ふくをよみ子のすまの末までも

ちれ何ふしの玉津御とく

一佛法の御御依ましはるしと一井伊谷龍澤寺
の祖山加著述せし井伊家傳記にたへり又上州眞福
にてハ教の寺を開基を了はるは後關の長原をとも中興
志給ふよし書書の縁起にえたり

一悉く書を信せん書多きよきを云ふに云ふむべし哉
當時流布する記録の中に此君方の御行い人を教
するを嗜み給い軍小崎へ給ひてハ西夫の勇を好し
給いしやうに書を多し或ハ言ふ京後居の故御加増
の時のとるとらしく著記せし者何れ西史ニ記録する
て兄もおのれ御多きれハ辨するにもおのれに由り
澄るハ精しく心を月也ハ云ふに云ふ

寛政十三年辛酉三月

北村久備謹識

そとくこの巻ハ一江戸ふらして奥板度の北村
須右久備をとりて難澁味らるるほと
祥壽公御遠忌の事おのれ御方のいへるハ中も
ある者し書き御玉ふて御いとある御借遣
ハ書重の御多きしと此御方様より乃御使
かねてハ相の氏御を蒙られしに西月の十日斗を
らきるもの御多き御小西堀氏御御多し
ととより御間かとのとあるハととより御後者
すくあるてのほられしハ御御にての御御
御御と乃御にんと打御してこれハそれと

今ハ市南家と云フ市繁葉の事自浄云々
カハカ龍の事云々云々云々
云々云々云々云々云々

祥壽云云は入道後累代相續はて二百年の今に
逢と宜名のほと云々云々云々
の云々云々云々云々云々
云々市仁智の事云々云々
市徳何云々云々云々云々
市章の族云々云々云々云々
の云々云々云々云々云々

此昌良これさまてそ志の難き書のもの
しけれハ志をらくかしらるゝのしと云いしに
福を若し取入はと云いして福退を却て己か
難きを艱難するよたらとされハかし来々云々
云々云々云々云々云々云々
の家つと云いして梅岡の邸云々云々
孝和え云々云々云々

西村昌良謹言

文化丁卯冬十二月廿七日西村昌良來話及

祥壽公事歸後假粵此書展卷數回顧得披雲傾

躍寫之云

文化戊辰春二月

立綱社多於石崎菴